

今回日本旅行のついでに社人研にお立ち寄りいただき、ご講演いただく機会を得た。

本講演は、昨年8月にNature Ageing 誌に掲載された論文¹⁾をベースにした内容であり、21世紀の先進諸国における死亡動向がどのようなものになるのか、平均寿命を数学的に展開して得られる「生命表のエントロピー (entropy of the life table)」と「死亡格差 (life span disparity)」という2つの指標の傾向を分析することで考察したものである。講演では、日本をはじめとする先進諸国では、20世紀に観察されたような平均寿命の大幅な改善は望めないのではないかとの見方が示された。その理由は、①生命表のエントロピーの分析によると、平均寿命を1年延伸するためには死亡率を全年齢平均で10%程度低下させる必要がある。しかし、②死亡格差指標によると、死亡は高齢期に集中する傾向が進んでおり、死亡率の大幅な改善を見込むのは難しいと思われるためである。その上で、今後は平均寿命の延伸よりも健康寿命の延伸こそが重要な課題であることが指摘された。

講演は、社人研会議室およびオンラインによるハイブリッド形式で、日英同時通訳を入れて行われた。会場・オンライン合わせて50名ほどの参加があり、講演の後には会場にて活発な質疑応答が行われた。日本のデータを取り出した解説なども行われ、日本の死亡動向を考える上でも大変示唆に富む講演となった。ご旅行中の貴重な時間を割いて、講演をご快諾くださったベルトラン・サンチェス教授に感謝申し上げたい。

- 1) Olshansky, S.J., Willcox, B.J., Demetrius, L. et al. Implausibility of radical life extension in humans in the twenty-first century. *Nature Aging* 4, 1635–1642 (2024).
<https://doi.org/10.1038/s43587-024-00702-3>

(福田節也 記)

日本地理学会2025年春季学術大会

日本地理学会2025年春季学術大会が、3月19日(水)から21日(金)にかけて、駒澤大学の駒沢キャンパスで開催された。日本地理学会が2025年で100周年を迎えることを記念して、「日本地理学会百年の歩みとこれから」と題したシンポジウムが開かれ、他に8つのシンポジウム、口頭発表、ポスター発表、高校生ポスターセッションが実施された。

口頭発表の「人口・行動」セッションでは、7件の発表がなされ、国勢調査や独自のウェブアンケートによる定量的研究と、聞き取り調査を軸とする定性的研究の双方がみられた。7件すべてが大学院生または学部生による発表であり、地理学界における人口研究の今後が期待できる。また、「農村移住者」「ライフスタイル移住」「地域おこし協力隊」といった、非都市的地域を指向する人口移動に関わるキーワードを掲げた発表が目立ち、そうした現象への関心の高さをうかがい知ることができた。

(久井情在 記)

第58回国連人口開発委員会

2025年4月7日(月)から4月11日(金)にかけ第58回人口開発委員会(CPD)が国連本部(米国・ニューヨーク)で開催され、国連日本政府代表部 加藤琢真参事官および筆者が出席した。今回のテーマは「健康な生活を保障し、すべての年齢でウェルビーイングを推進する (Ensuring healthy lives and promoting well-being for all at all ages)」であり、パネル討論、各国ステートメント、